



アンギラ島のラストファリアンたち

長嶋, 佳子

柴田, 佳子

(Citation)

太平洋学会学会誌, 31:111-137

(Issue Date)

1986-07

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001830>



アングエイラ島のラスタファリアンたち

長嶋 佳子

はじめに

昨夏、東京大学大学院生学術研究奨励金を得て、以前本誌でも紹介した¹⁾ラスタファリ運動のカリブ地域での拡大発展について、現地調査を行った。対象とした七島のうち、米領ヴァージン諸島セント・トマス島については一考察を試みたが、次に訪問したアングエイラ島 (Anguilla) について、本誌で報告したい。ラスタファリ運動は一九三〇年にジャマイカで発生して以来、島内のみならず島外へも拡大し、その名はカリブ海地域内では知られぬ所が無い程である。また地域外でも、欧米を中心に数多くのラスタファリアンが存在し、ラスタファリ文化なるものを形成してきた所もある。宗教的信者という形態をとらなくても、イデオロギーや生活様式の信奉者、賛同者といっ

た人々をも含むと、その影響力は世界大に広まってきたと言っても過言ではない。

ではアングエイラではいかなる現状にあるのか。その発生と展開、イデオロギーと実態、社会内での位置づけを中心に、アングエイラでの特徴を、主にジャマイカやセント・トマスと比較しながら述べることにする。今回は予備調査の域を出ないものではあるが、各島それぞれ独自性があり、各社会内の歴史、諸事情等の文化的コンテクストと密接に絡み合ってラスタファリアンが生まれ、運動が展開し現状に至っている²⁾ので、個別に報告することにしたい。ところで、アングエイラのラスタファリアンについての研究状況は、いかなるものであろうか。以前セント・トマスの事例でも同様のことを指摘したが、調査・研究の対象になったことは、アングエイラでは全くない。実際はセント

・トマスよりもさらに悪く、書かれたものとしてはわずかに「新聞でかつてほんの少し言及されたことがあったかもしれない」程度のものである。学術文書どころか簡単な紹介すら見い出せなかった。島内唯一の小さな図書館も全く役に立たず、在野も含めて地元の研究者もいなかった。結局、唯一の情報源はラスタファリアン自身であり、インタビューを通して得た一次資料と彼らについての一般市民の意見を基に本稿は構成されている。

ラスタファリアンについて述べる前に、まず彼らを生んだ母体であるアングエイラ島の概況を見ておこう。

1. アンゲイラ島の概況

1. 自然環境

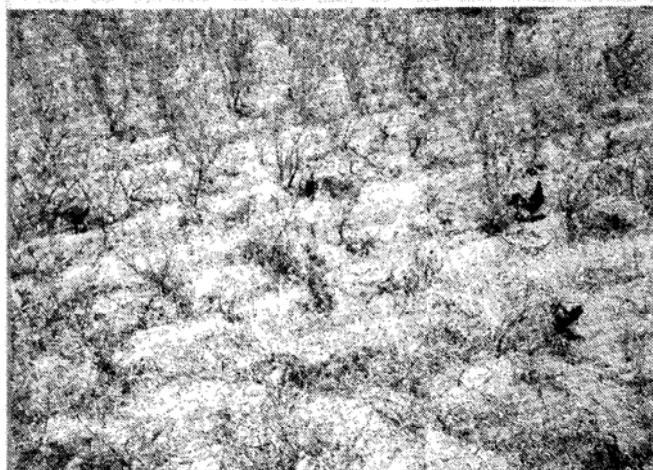
島は面積九六km²(本島のみで八八km²)、長さ二六km、幅二・五〜六・五kmと極めて小規模で、しかも最高で六〇m程しかない平らな低地の島である(写真①②)。



<写真①> アンゲイラ島。平らな島。



〈写真⑤〉 土質の悪さはこれでも一目瞭然である。写真④のように石がゴロゴロしている所は、それらをまず取り除き（所どころに瓦礫の山を作る）、土壌部分を出すことから始めなければならない。多くの島民は農業に向かないと言って熱心ではない。



〈写真⑥〉 荒れた農地。天水に依存する所では、地肌は乾燥し、食物はあまり実らない。Stand pipeを設置し、水を十分噴出させると植物は青々と成育する。鶏も多く飼育され、卵を売って生計のたしにする。“Fresh Eggs For Sale”の看板は島内の所どころに見られる。



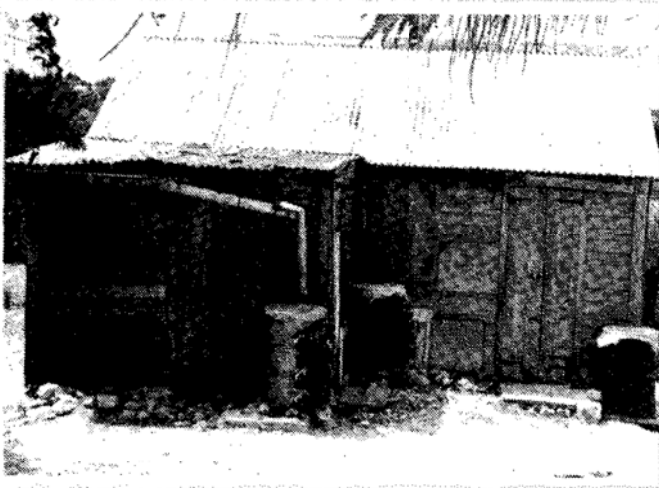
〈写真②〉 低平地が続く。雨不足のため乾燥し、地味は良くない。人家もまばらである。牛、山羊、鶏を飼育する者も少なくない（手前に放牧されている）。



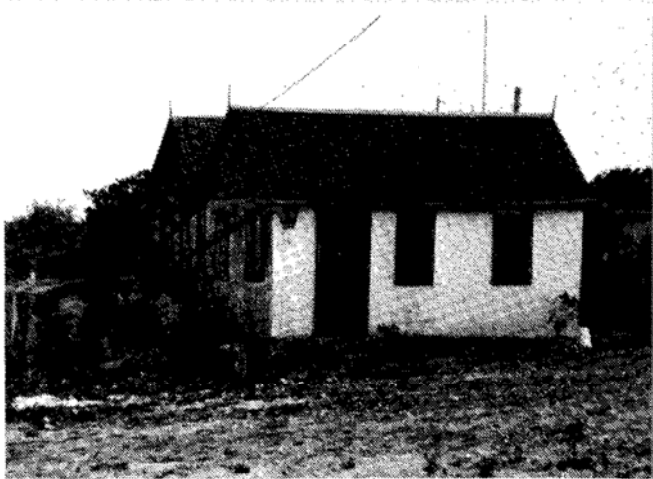
〈写真③〉 さんごが露出



〈写真④〉 このような土質では、現在牛や山羊などが放し飼いされている。後方に柵が見える。



<写真⑦> 旧式の天水確保法。雨樋をつくり、そこから受けてドラム缶に貯めたり、屋根からしたり落ちる分も受ける。風が強く、ゴミを入れないよう濾過用布をドラム缶に取り付けている。



<写真⑧> 一般の民家は家屋の横にコンクリート製の大きなタンクを作り、そこに天水を貯める（それ以前は写真⑦のようにドラム缶を使用していたと思われる）。1つの貯水所に1~2本（この場合は3本）の雨樋から受けている。新築の家でも貯水所はそのまま使い、樋を新しくしている。

東カリブのリーワード諸島の最北端で、隣のセント・キッツ島 (St. Kitts または St. Christopher) の北方百 km に位置する。セント・キッツやネイヴィス島 (Nevis) は火山島であるが、それとは対照的にさんご島である。島の約三分の一はさんごが露出し、大半は背の低い牧草には適すが、土壌部分が薄過ぎて耕作には不適当である(写真③④⑤)。ただ、残りの土地には肥沃な部分も広がる。

年間降雨量は千 mm と少なく、しかも依存不可能であり、水の確保は最も重要な案件の一つである(写真⑦⑧⑨⑩)。偏西風はさえ切るものがないためか強く感じられる。訪問時の七月、雨不足

が嘆かれていたが、ある夕方「シャワー」に会い、また夜に強風と雷を伴う嵐のような雨も経験したが、とても乾燥し切った大地を潤すには至らなかった。海上の雨雲が「不思議と」島には至らない。また時折ハリケーンに襲われ、多大な被害を受けたこともある。

2. 人口

総人口は一九七四年の国勢調査で六千五百人強(七〇年には五千人)で、人口密度は五七人/km²である。女性の方が男性より約三百四十人多い。年齢別構成を見ると(表1)、成人前の若年層が半数以上(五四・四%)を占め、青、壮、老年層がほぼ同数の、太いT

字型構造となっている。人口移動率も高い。これらは島内の産業基盤が脆弱で高い失業率を生んでいることと密接に関連している。それはラスタファリアンを生み出す一要因でもある。島民の大多数は黒人系で占められる。少数だが白人との混血ムラトも存在し、若干の中国系もレストラン経営等をしている。

3. 政治

一六五〇年から一九六七年まで英領植民地で、他島嶼同様、奴隷制を布いていた。また当時の地域統合、自立化への動向に沿って、セント・キッツ及びネイヴィスと共に一九六七年、数名

が主導権を握る自治領の連合州 (Associated State) に加わった。

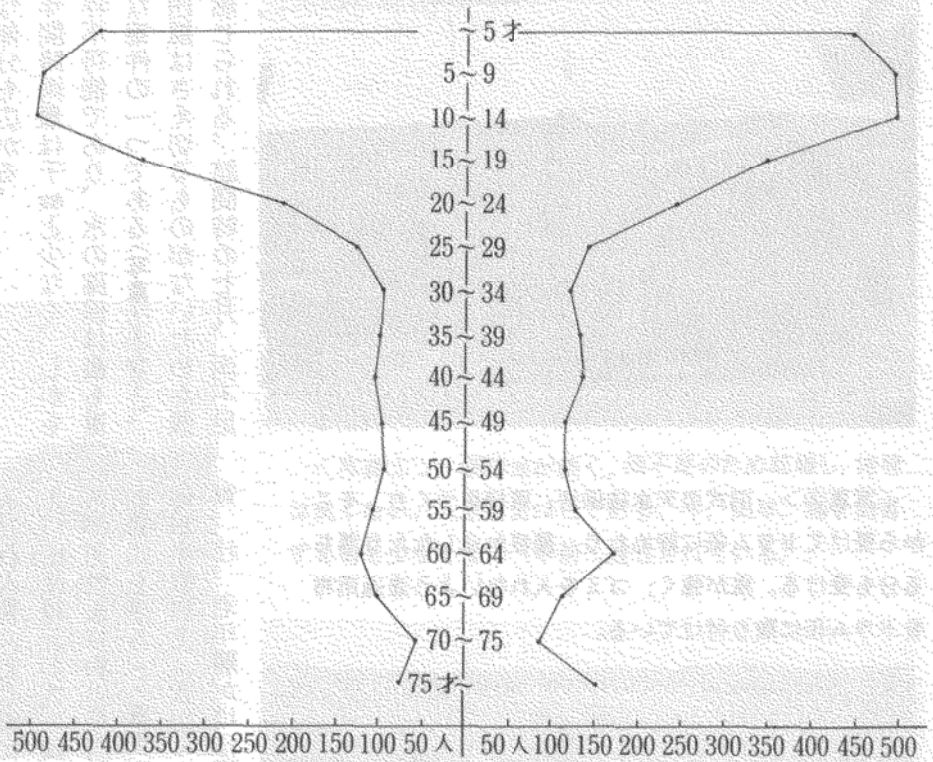
しかしセント・キッツからも距離的に離れていること、社会構造上の相違、近くのヴァージン諸島と比較しても経済的發展レベルが低いこと等を背景に、また直接的には、セント・キッツのブラドショー首相 (Premier Bradshaw) 政権の犠牲にされた住民が見なして反発し、六九年には政治的に分離する。当初単独で共和制の独立国を目指したが、英国 (R・ウェブスター政権) より落下傘部隊も駆けつけ、英連邦加盟諸社会に多大な共感や憲法上の問題等を喚起したが、結局単独で英国の属領に戻った。

このアングイラ事件が提示した諸問題で、他の域内英連邦加盟社会が深い関心を寄せたのは、望ましくない外国の干渉という点であった。国際政治的に見ても、国際法、断片化、地域協力の小国の外国支配ないし搾取、軍事介入が問題となった、とバリーとシャーロック (J.H. Parry & M. Sherlock) は述べている。¹⁵⁾

七六年には独自の憲法を制定し、八

4. 経済と社会

かつては他島同様、アフリカ黒人奴隷を使用して砂糖を輸出していたが一八三四年の奴隷解放後まもなく砂糖



出所) Anguilla Abstract of Statistics 1960-1982 (Finance Dept.)
1984年1月 P.2より作成



<写真⑧> ココナツ、バナナ、プランテン、タロ芋、サツマ芋、タニアを並べて売っている (首府ザ・ヴァレイで)。品数は少ない。箱の中からオレンジを取り出している。価格も高めである。手前の計りの分銅は3種類。少し離れた木陰にも数人のおばさんたちが店を広げていたが、おしゃべりに花は咲くが、ほとんど買手もつかない状態であった。学校は休みになり、子供達は母親の手伝いをする。

産業は減び、後に換金作物用として海島綿栽培が導入された。しかしこれも繁栄することなく(現在、野生状態のもの若干存在する)、また主要産業の一つである農業も、不毛な土地のため自給自足には至らず、とうもろこしや豆類の少数の作物を栽培する程度である(写真⑨)。また牛や山羊の飼育も(写真⑩)、隣接島嶼へ出荷している。主な収入源は漁業(魚とロブスター)に依存し(写真⑪⑫)、その他

塩湖から採れる塩も重要な産物である(写真⑬⑭)。塩の輸出先は主にバルバドス、トリニダード・トバゴ、プエルトリコ等で、域内向けである。全般に経済活動は停滞気味で、正確な数字は公表されていないが、失業率はかなり高い。一九七四年国勢調査によると、男性三〇八八人中八三三人、女性三四三一人中三四七人、つまり各約二七%、一〇%が就労しているのみである。その内訳は(表2)で示した。

現在、経済開発5ヶ年計画（八一～八六年）の下に経済の多様化と観光産業の促進化を進めているが、大きな成果はあまり期待できない。これまで大幅に、ヴァージン諸島、蘭領アンティール、英本国その他に在住の移住者からの送金と、島外からの帰島定住民に依存してきたこと、及び六九年以降植民地となったことで本国から多大な援助を受けて道路、水道、電気その他の公共サービスを改善してきたが、その



〈写真⑩〉 放牧されているのは山羊が最も多い。牛はサ・ヴァレイで見かけた。1人で連れ歩く場合、せいぜい数頭までのようである。中年男性が最も多かったが、少年の姿も若干見かけた。ろばも飼われているが、老人用乗物、運搬用がほとんどである。観光客を乗せていることもある。ちなみに、運搬は頭上運搬が一般的である。

後の維持・発展も島内独自の自律性に任せられないこと、そして頼みの綱である観光業も、単に美しく未開発の海岸部だけアピールしても他との競争に勝てそうもないこと等々で、「発展」への道のりは遠い状態にある。
人的移動率も高い。これは必然的に情報・知識量の増加、外部からの刺激といった諸影響の増大を伴うものである。観光業もそれに大きく寄与しているので、もう少し詳しく見てみよう。



〈写真⑪〉 このように色とりどりのボートが浜辺に数多く並んでいる所がいくつかある。なかにはラスタカラーに塗られているのもあり、所有者はラスタファンであろうか。中には観光客用のモーターボートなどもある。中規模以上の船が停泊できる場所はない。座礁した沈船などの残骸も海から突き出ている。中～大規模船は貨物船がほとんどである。クレーン船やコンテナ船も出入港するが、波止場は整備されているとは言えず、簡易船着場といった感じである。大型船は沖に停泊し、はしけが利用される。大型客船の寄港は無理である。



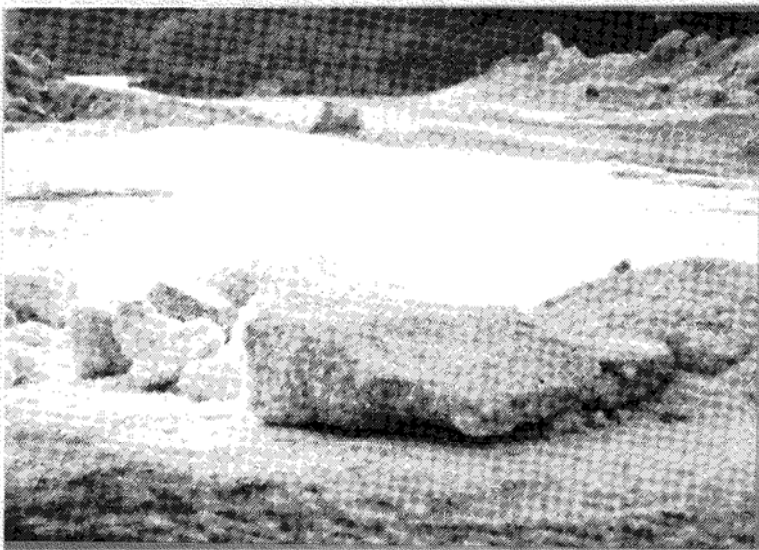
〈写真⑫〉 ボート建造中。このような小型木造船がほとんどである。庭先に1艘置いてある家が少なくない。たいてい動力エンジンとオールを併用し、沿岸近海用である（エンジン無しのも、もちろん使われている）。投網や突き棒も使われている。海に関する外の仕事は男の領域である。



〈写真14〉 塩湖。カリブ海の青さと塩湖の白とのコントラスト。



〈写真13〉 大きなサザエやコンク貝はよく採れる。素もくりでも採れる。貝殻も装飾品として売られる。海草類は種類は多くないが、採ってスープに入れて食べている島民もいる。海草に対する関心は他のカリブ海島民同様低く、名前も利用度もほとんど知られていない。



〈写真15〉 塩のかたまり。岸边は塩の華のように塩の小片が風に飛ばされていたり、浜に吹き上げられたかたまりで白く変色している。

現在観光開発の只中にあるが、観光客数は他の島嶼に比べて極めて少ないと実感した。統計上(七四―八二年)は夏(特に八月)がピークで、全体的に見ると訪問者数は増加し、七九年からは大幅に伸びている(表3)。しかし総数は例えばセント・トマス島で二〇万人(八〇年)台にのぼるのと比較しても極めて少ないことがよくわかる。滞在時の七月は、八月と比べると訪問者数は減っているが(表4)、島中を巡って出会った観光客は二十人に満たなかった。リゾートホテルやゲストハ

〔表2 職業別労働人口 1974年〕

職 種	男	女	計	%
専門職・技術関係	65	89	154	13.1
行政・管理・事務関係	45	40	85	7.2
セールス部門	47	62	109	9.2
サービス部門	52	100	152	12.9
農業・漁業	95	3	98	8.3
生産・建設・運輸	529	53	582	49.3
計	833	347	1,180	100.0

(産業別に分類すると) *農業・土木工事・郵便局は含まず

農・漁業	97	3	100	8.5
製塩含む製造業	61	35	96	8.1
電気・水道含む建設	296	23	319	27.0
小売・卸売	54	62	116	9.8
運輸・コミュニケーション	149	9	158	13.4
政府	108	124	232	19.7
その他のサービス	68	91	159	13.5
計	833	347	1,180	100.0

出所) Anguilla Abstract of Statistics 1960-1982. p.25,26

[表3 訪問到来者数]

	男	女	計	空路	航路
1974	2,375人	1,359人	3,734人	2,807人	927人
：	：	：	：	：	：
1979	3,528	2,653	6,181	3,619	2,562
1980	4,618	3,554	8,172	4,421	3,751
1981	6,802	4,924	11,726	5,546	6,180
1982	9,801	8,149	17,950	5,362	12,588

出所) 前掲書 P.11 より

[表4 訪問到来者数の月毎の比率]

	1974	1979	1980	1981	1982
1月	7.1(%)	7.9(%)	7.7(%)	7.3(%)	10.9(%)
2月	7.2	8.3	9.0	8.9	9.4
3月	8.2	8.7	8.9	9.2	10.2
4月	10.0	8.2	8.0	6.5	8.7
5月	9.8	7.0	6.8	6.3	8.1
6月	8.3	7.6	9.5	6.1	6.3
7月	9.3	10.3	10.7	9.0	4.2
8月	11.9	14.2	13.0	13.8	12.5
9月	5.7	4.7	6.4	4.7	4.9
10月	5.9	6.9	6.0	7.5	7.9
11月	7.4	7.3	6.1	8.9	7.0
12月	9.2	8.9	7.9	11.8	7.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所) 前掲書 P.12 より

ウス、長期滞在用のアパート型やコテージ風別荘は(書いた順にその数も多くなるが)、廃業同然やほとんど全室空室が目につき、一方では人気の全く無い海岸沿いに新しい近代的宿泊リゾート施設をいくつも建設中であり(写真⑭)、極めて不自然な社会景観を呈していた。因みに訪問者は他の西インド諸島からが第一位で(写真⑮) 次いで米国(八

数が一日未満(八一〜八二年)で、一週間以上の滞在者は少数であり、観光収入を今後期待するには多くの課題を抱えているのである。

以上概略したように、例えばジャマイカやセント・トマスのように観光客が大量に訪れるわけでもなく、彼らに代表される富裕層と島民の社会経済的文化的格差は、比較的緩和された状態にあると言える。元来ジャマイカその他で見られるような大規模な砂糖プランテーションも発達せず、小規模地主が存在したにすぎなかったアングイラ



<写真⑭> 同型のアパート式宿泊施設を4つ建てたばかり。白い砂浜とカリブ海の透明で何色も重ねた青さは、人に犯されていない。手前は塩湖。周囲はただ藪地とヤシが植わっているのみ。ここは人や車もほとんど通らない舗装自動車道からデコボコ道を車で30分程走った行き止まりの所にある。

では、島内での経済的格差も相対的に小さかった(写真⑯)。商業農業の未発達はそのなりに問題を大きく抱えてはいるが、地主層と土地無し(小作)農民との闘争、前者による後者の搾取といった「典型的」なパターンを生みにくかった。観光客は主に海岸部に滞在し、一般島民との接触は他島嶼に比べて少なく、表面的である。島民側に彼らに対する羨望はあっても、被収奪感、怨恨や怒りを直接対象化する程ではないようである。

セント・トマスの方が観光産業の悪影響を強く受けているが、アングイラも願わくば観光開発で経済の活性化を図ろうとしているので(今後の追跡調査が必要だが)、現在は微妙な位置にある。

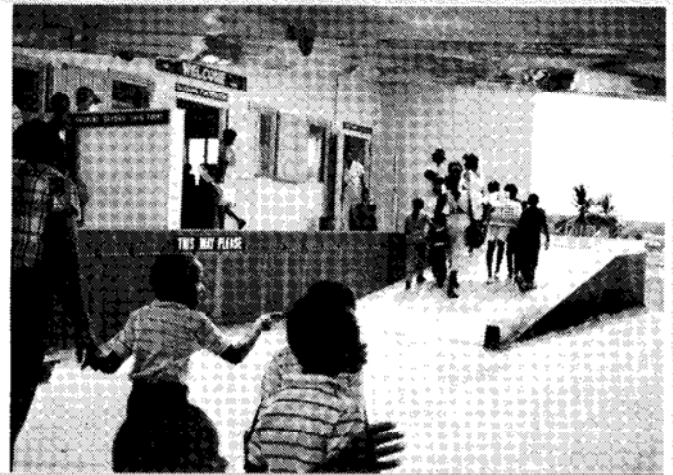
り、外的刺激に敏感なラスターファリアンにも複雑な影響を及ぼし始めていることは注目しておきたい。

失業者の多さについては、ジャマイカやセント・トマスでも共通しているが、セント・トマス同様アングイラも属領であり、本国に一応の「安全弁」を求めやすい構造にある。ジャマイカと異なり、中心地(ザ・ヴァレイ)近辺にスラムを形成する必要はない。小さく静かでさびれた島の中心地には、雇用機会やより良い生活の場の確保という保障はあまりないのである(写真⑳)。

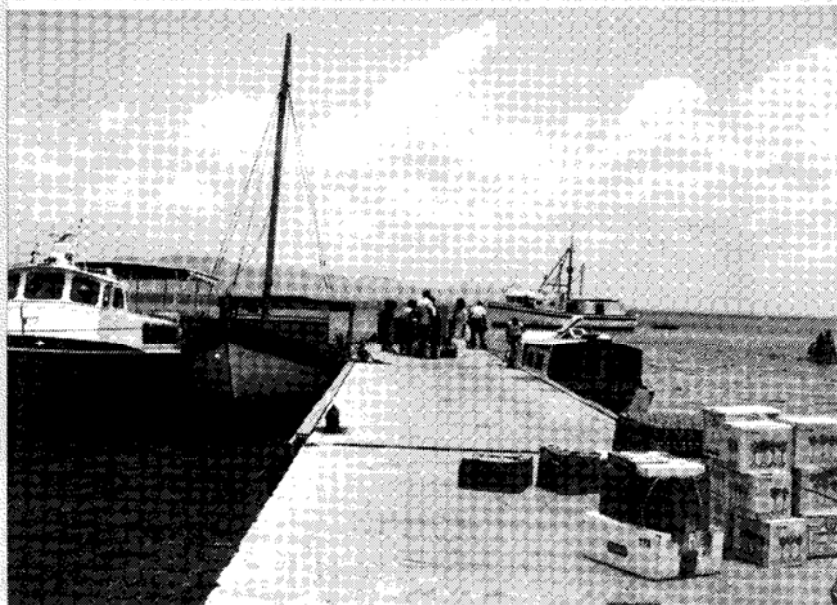
島には未開拓地も広がり(写真㉑㉒㉓)、空屋ないし廃屋も数多く(写真㉔㉕㉖)、在住人口の少なさが際立つ。島内では中心一周縁といった構造



〈写真⑬〉 アンギラ航空機で島を出る人たち。同航空は毎日、セント・マールテン、セント・トマス、セント・キッツ島へ就航している。その他カリブ海地域へチャーター便を出している。



〈写真⑭〉 ヴァージン諸島航空機でセント・トマスより来た人たち



〈写真⑮〉 セント・マールテンより着いたばかりのフェリーから降り立った人々と荷物の陸揚げ風景。後方の山がちな島がセント・マールテン島。右端は荷物を乗せにボートで渡るところ。



〈写真⑯〉 フェリーは毎日出て日帰りできる。片道30分前後の距離。ただし移民局や税関を通らねばならない。

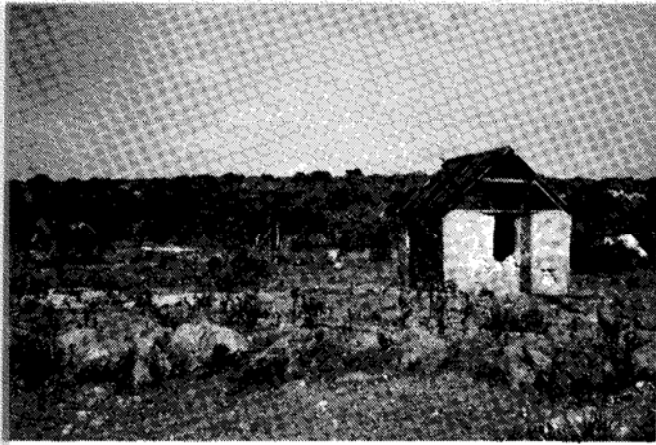
〈写真⑱〉 フェリー発着所付近で。身なりは小ざっぱりとし、自家用車、バイクを所有している人は少なくない。自転車を利用する人もいる。少ないがタクシーも走っているが、料金は高い。



〈写真⑲〉 島内では貧困層の人びと。しかしいわゆるスラムを形成しているわけではない。ボロをまとっていることもなく、乞食の姿も見なかった。公共の貯水タンクから水を取る。

5. 文化
 英国の統治期間が長かったため、言語をはじめとして文化の諸側面にR・レッドフィールド (R. Redfield) の言う「大伝統」(great tradition)としてその影響が及んでいる。宗教も「表5」で見られるとおり、七四年の時点で島民のほとんど(約九九・六%)がキリスト教を信奉していると答えており、しかも約四五%はアングリカンである(写真⑳)。セブンスデイ・アド

的対照ないし格差は、顕著に露呈することがほとんどないのである。
 また雇用機会の確保においても重要な鍵を握る教育についても、八一年現在、公立小学校六校、中学校一校のみ(生徒数二二〇〇人)で、さらに教育を受けたい者は島外へ出てゆかざるを得ない。そして一度出るとなかなか島に戻ってこない(何よりも職場がない)ので、頭脳流出にもなっている。あとは島内で定職が得られない場合、失業者として滞まり機会を待つなり、短期・長期の契約労働者として近くの島嶼へ出る等しか身の寄せ所がない。ただし実質的利潤追求のみを求めなければ、失業中の身でも簡単な店を建て、飲食物等の販売の自営業を気ままに楽しむ程度のこととは可能である。ラスタファリアンのインフォーマントの何人かはこのタイプに相当した。



<写真①> 未開拓地が広かに広がる。



<写真③> ザ・ヴァレイの住宅地



<写真②> 廃屋はあちこちに見られる。

〔表5 男女別宗教人口 (1974年)〕

	男	女	計
アングリカン(国教会)	1,361人(44.1%)	1,566人(45.6%)	2,927人(44.9%)
メソヂスト	1,189 (38.5)	1,266 (36.9)	2,455 (37.7)
セブンスディアドベントリスト	185 (6.0)	180 (5.3)	365 (5.6)
バプテリスト	107 (3.5)	148 (4.3)	255 (3.9)
チャーチ・オブ・ゴット	78 (2.5)	101 (2.9)	179 (2.8)
カトリック	64 (2.1)	85 (2.5)	149 (2.3)
その他のキリスト教	84 (2.7)	76 (2.2)	160 (2.4)
非キリスト教	20 (0.6)	9 (0.3)	29 (0.4)
計	3,088 (100.0)	3,431 (100.0)	6,519 (100.0)

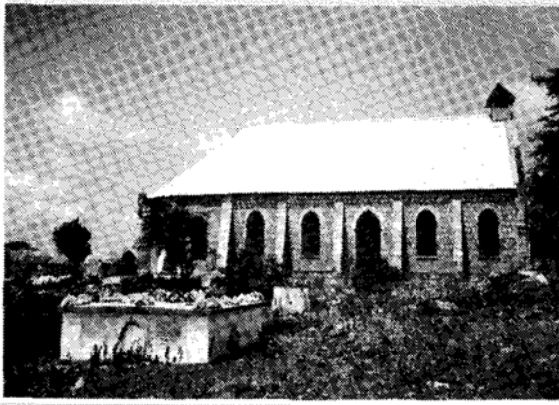
ペンテイストやチャーチ・オブ・ゴッド等の新興宗教に属するものを除いた、いわゆる伝統的な正統派は約八九割にもぼる。この宗教事情の意味するところは実に大きいのである。

この時ラスタファリアンが一般的な解答をしたか不明であるが、もし一般に考えられるように非キリスト教の部類に自己同一化していれば、

〔表6 15才以上の男女の配偶者の有無 1974年〕

	男	女	計
単身(配偶者無)	848人(50.3%)	875人(43.6%)	1,723人(46.7%)
既婚(有)	751 (44.6)	878 (43.8)	1,629 (44.1)
未亡人	62 (3.7)	231 (11.5)	293 (7.9)
離婚	24 (1.4)	23 (1.1)	47 (1.3)
計	1,685	2,007	3,692

現在まで増加の一途を辿っているといふのが彼らの意見なので、最近の統計は出ていないので予測の域を出ないのだが、相対的にキリスト教徒数は若干減少しているはずである。ただしラスタファリアンのなかには「真のキリスト教徒」を自称する者も少なからずいるので、「その他のキリスト教」に自己同一化する可能性もある。もう一つの可能性として考えられるのは、例え



〈写真②〉 アングリカンの教会

ばアングリカンとして生まれ育った宗教的背景(環境)で答えているかもしれないことである。それは現在でも、ラスタファリアンがキリスト教会に時折顔を出すと自ら認めているからである(ただし国勢調査のような公の場でそのようなことを表明することもあまり考えられないのではあるが)。

いずれにしても、キリスト教的価値観が是とされ、それからの逸脱は悪の表象と考えられていることに相違はない。それは結婚観、家族観にも深く関わってくる。理想型ないし規範としては、一夫一婦制で、父ないし夫に「かしら」としての権威をもたせ、離婚は特別の理由がない限りすべきではない、つまり家族関係の永続性が前提とされている。そして結婚という正式の手続きを

経てようやく一組の男女間関係は夫婦関係と見なされ、新しい家族の誕生となる。

ただし、詳細なデータはないが、七年の統計(表6)では十五才以上の男女の配偶者の有無について、全体の四六・七%が未婚、四四・一%が既婚となっており、正式な配偶者を持たない单身者の比重がかなり大きいのが注目される。この地域の典型的なパターンとされる母親中心家族(matrifocal family)、同棲婚('common-law marriage')等の組合せがアングイラでもある程度見られることを示唆している。また母親の出産年齢を見てみると(七五〜八二年)、十五才〜二十九才が一大ピクになっており、いわゆる婚外交渉による出産例も、統計はないが少なからずあると考えられる。

以上かいつまんで述べたところがアングイラ社会の特徴であるが、次に具体的にこの社会のラスタファリアンたちについて述べよう。

Ⅱラスタファリアンの現状

1. ラスタファリアンの発生と増大
ラスタファリ運動の発生について、セント・トマス同様、不明な部分は大い。明確な情報を提供できるインフォーマントに出会わなかったので、不

正確なところもあるが、その始まりはセント・トマスと類似して十数年前であるようだ。そしてやはりセント・トマスの場合と同様、セント・キッツ生まれの当時十七〜八才のザッパウ(Zappa)と名乗る男性がラス・アイア(Ras Iaa)と共に来島したのがきっかけとなったと述べたインフォーマントが少数だがいた。何故セント・トマスの例と同じなのか不明であるし、この点についてはさらに正確な情報を得なくてはならないが、島嶼間の人的移動が頻繁にあるので(写真②)、類似していても決して不自然ではない。ザッパウらのその後の形跡はやはり不詳であった。そしてセント・トマス同様、創始者は各個人であるという認識が一般的であった。

とにかくラスタファリズムについての知識は多かれ少なかれ一部の若者に伝わり、それが十数年のうちに徐々に広がったようである。彼らの人数も不明であるが、八五年七月現在四〜五百人はいると主張するラスタマンもいたが、それは誇張しすぎて、せいぜいあるインフォーマントたちの言う七十数人が妥当と思われる。それは総人口の約一%、男性人口の二・四%である。その拡大の速度を、八五年七月現在のラスタファリアン数を基準にしてセント・トマスと比較すると、そこでは誇張して約千人、総人口四万四千人強

の二・三%に満たないが、その人口比はアングイラよりやや大きい。人口規模にかなり格差があるので全体として受ける印象も大きく異なるが、セント・トマスでは急速にラスタファリアンが増加中と言われているのに比べ、アングイラでは「ごく少数で、少しずつ増加しているかもしれない」という程度の受け止め方をされている。実際アングイラではほんのマイノリティとしか言えない程、セント・トマスとはやや異なり、島内で見かける頻度は少なかった。

2. 拡張過程

またセント・トマス同様、ラスタファリアンがどのように広がってきたかについても、確かな事はわかっていない。他島嶼でのラスタファリアンの実態調査から、訪問した各社会のほとんどで彼らの存在は「運動」として理解できると実感した。アングイラの場合、組織や集団形成の試みは一部であり、これまで何度も話し合われたりしてその必要性はある程度認識されている。しかし現在までその試みが持続し拡大しているとは考えにくい。彼らの間にラスタファリアンとして共通の目的意識等を持ち、共に行動するなどの「まとまり」は見られなかった。

個人がばらばらに存在し、友人知人関係によりせいせい二三人が共に

行動したり、数名が集まることはあっても、相互にラスタファリアンとして連絡をとり、コミュニケーションを深め合うことはあまりないという。ラスタファリアンとしてはむしろ独立独歩型の人間が散在し、それをラスタファリアンという唯一の共通項でくくり、緩やかな集合体がある、という見方を外部の観察者はすることが出来るかもしれない。ただし彼ら自身はそれを意識したり問題とすることはあまりない。連帯感や統合意識は自然に自己の内部から出てくる内部生成的なものというよりは、むしろ外部からの刺激に触発されて起きる外部生成的なものである。以上簡単に見たように、ラスタファリアン「運動」の萌芽がわずかに見られると理解した方がよい。

ところで十数年前にラスタファリアンの種が蒔かれて後の経過についてであるが、セント・トマスでのように、断続的にレゲエを中心とする音楽関係者のラスタファリアンが入れ代りたち代り訪問し、ラスタファリズムのメッセージを注入し、その影響を（強く）受けて島内にラスタファリアンが次々と誕生したというのとはやや異なった状況をアングイラでは呈している。

それは同島が

- (1) 地域内での低開発性、周縁性、知名度の低さ（という位置づけ）
(2) 面積・人口の小規模性

(3) 観光資源及びそれ以外の誘致資源の欠如とそれに伴う島外訪問者（観光客を含む）の少なさ

(4) 産業未発展ゆえの若者世代を中心とする失業率の高さ

(5) 以上を背景とした人口移動・流出率の高さ

等々の要因を持ち、音楽市場としては不適當であると考えられるためか、世界的に著名なボブ・マーレイとウェイラーズ等のミュージシャンが来島し、コンサートを開いたという情報はなかった。著名人の音楽は主にラジオ番組やレコード、カセットを通じて間接的に聞かれるにすぎない。

ところで前述したように、セント・キッツ、セント・トマス等の近隣島嶼へ出かける島民は多く、ラスタファリアンで移住した者も少なくない。より活気があり音楽市場としても悪くないこれらの島々で、開かれるコンサート等に接する機会もラスタファリアンを持つであろう。またレゲエ他ラスタファリズムに関する情報も、比較的多くまた頻繁に入手できるはずである。そこで得た情報はアングイラに直接、間接に持ち帰られ、友人・知人のネットワークを通じて送られ、広がったことは十分考えられる。つまり外部から直接アングイラにもたらされた情報・知識は多くはないが、アングイラ人が島外へ出て求めたものがやがて直接、間

接に戻元されるというパターンを想定することはできる。ただ、セント・トマスで若干見られたような、島のラスタファリアンが訪問し、それが展開や拡大の一つの契機になるということはアングイラでは聞かれなかった。

3. 生活の実態

ラスタファリアンの年齢層は、セント・トマス同様、そのほとんどが二十

才代の若者である。性的偏差は顕著で、女性は二人のみ、あとは全員男性である。しかも大多数は単身である。同棲相手ないし別居の慣習上の妻や愛人とその子供がある者も若干いる。女性二人のうち一人はドミニカ人 (Commonwealth of Dominica) で、故国へ帰島したばかりであった。もう一人はキヤロルという名の島生まれの女性で、島の外のカレッジで教育を受け、現在、



〈写真②〉 ザ・ヴァレイのメイン・ストリートのコーナーで、大木の下に建てられた自然食販売店。店の外装・内装はラスタカラーで彩られ、正面には象徴的な絵画も描かれていて、一見してすぐわかる。主に友人、知人が立ち寄り、情報交換をしたりする。店主はきままに店を経営し、彼がない時はたいてい閉まっている。



<写真25> ラス・スマイトの店。出入口には「禁煙」

「文化・ダンス・レゲエ・ヴァイブス・黒・ライナー・HiFi・アィタル・フルーツ・ジュース・DJ」ヴァイブス・Bic J^S・ライオン[®]の巣・金曜日夜」のサインがある。正面にはアィタル・フルーツ・ジュースの材料（バナナ、パイナップル、オレンジ等）、王冠をかぶったライオンが黒いエチオピアのキリスト教会の十字架（赤と黄のリボン付き）を右手（足）で持ち行進の姿、たて髪の長い（ロックスのような）ライオンの顔、ドレッドロックスのラスタマンの顔3様（1人はラスタカラーのタムをかぶっている）の絵が描かれている。



<写真26> 店内の販売品例の一部。蜂蜜 (miel de abejas), GOYA 印のレンズ豆 (lentejas) はプエルトリコ産, くずうこん粉 (arrowroot flour) はセントヴィンセント産

中学校の教師をしている（彼女が不在のため直接会うことはできず、この島のラスタファリアンについては、実質上男性のみであり、女性の視点は排除されている）。

彼らの多くはラスタファリアンになってからの年数が二十年を越すことは稀であった。学校を出る前後からの潜在的求職期間中になった例が多い。年齢的には十代前半からである。それはアイデンティティ模索中の、人生で最も感受性に富み、それだけ不安定である時期の一つに相当する。島のエリートは、奨学金や家族・親族等よりの財政的援助を得て、島外で高等教育を受けることができる。その少数者集団に

入らない者のうち大多数は、何らかの職に就き給料を得、自立したいと願う。ところが前述したように島内には就業機会も極めて限定されており、失業者として島内外をぶらぶらす結果になる。

ところで、仕事をしたくてもやりたない職種につけず、欲求不満になり、既成の体制全般に対する批判心はますます旺盛になるのが常である。特に体制の中で安泰然とし、聖職者や政治家の一部に見られるように、言動不一致を（露骨に）示す者は非難の鋒先を向けられる。将来の生活、自己形成を真剣に考え、周囲を見渡しても、身近な場には理想のモデルは見つからない。自

らの社会・経済的不利益や不遇は、「体制」そしてそれを統御できる政治家たちによる非を充たないし転化される。文化的にも、例えばイデオロギー的に植民地主義が支配するなかで、他の文化創造的な選択肢をとりあぐねている。キリスト教的価値観も生活の全般を覆っている。それを全面的に否定する程忌避する理由もない。

そのような一種の境界領域、曖昧さと混沌が入り混じる空白状態に都合良く流入したのがラスタファリズムであったと言える。社会、経済、政治、既成のイデオロギー、宗教/世界観他、多岐にわたって現状に批判の警鐘を鳴らし続けるレゲエのメッセージは、い

わば無名のラスタファリアン、そして口封じられた社会の底辺層の声を代弁するものと理解される。また最も重要な領域とされる霊的、精神的側面の渴望も、既成のキリスト教では満たされなかつたが、ラスタファリズムでは大いに期待できると言われる。それは後者が一つの生活様式であり、モデルとなるべき政治家とキリスト教聖職者に代表される言動不一致をもたらずに済まないものと受け止められて、これまで生きられたからである。

多くのラスタファリアンが失業中であつたり、短期契約労働など極めて不安定な就業状態にあることは前にも触れたとおりである。体力的にも最も充



〈写真⑦〉 通称「リトル・ライオンの巣」。手前の看板にはその他「ベスト・レゲエ・クラブ」の文字と中央にエチオピア国旗を持ったライオンの行進像もアレンジされ、すべてラスタカラーで彩られたものが見える。立看板にはやはりラスタカラーで「地元産! フルーツ・ジュース・アイトル・ホールフィート(全麦)・木の実と野菜バーガー・とうもろこしの穂軸・ココナッツ水・モービー・ジンジャービール」と特製メニューも書かれている。入口にはやはり同色のコンビネーションで、レゲエ・パーティ(毎週金曜日夜)の宣伝が、踊っている男の姿とスピーカーを描いて貼ってある。店の外には机と椅子を3ヶ所に置いている。



〈写真⑧〉 ラス・ジュ・ライオン。彼の店の内で。緑色のタムをとり長いロックスを披露。天井からレコード形でラスタカラーの装飾品をぶら下げ、ピンクの壁に様ざまな絵画をかけてある。この入口を入ってすぐの部屋にはスピーカーを置き、踊れるようになっている。隣室も整備中。

実している若者が手ぶらでいるないし遊んでいるのは、彼ら自身、一種の患だと認識している面も少なくない。なかには自らの手で建物を建て装飾も施し、自然食販売店や飲食店の経営を試みる者もいる。まだ利益を上げて誇れるまでには至っていないが、そこを拠点に友人、知人が現在以上に多く集まる場を提供することは可能である(写真⑨)。

① ラス・スマイトの例

ラス・スマイト(Ras Smite)の店もその一例である(写真⑩)。二五才の独身男性で失業中。十七、八才で中学校(5th grade)を出てから定職に就かず、島内外を「行ったり来た

り」の生活が続く。その頃からラスタになる。ロックスは十二年前より伸ばしている。子供の頃から(小)動物と過ごし、草原をよく歩き回り、自然と一体の生活をしてきた。学校を出るまでは「全てがうまくいっていた」。高等学校へ進学せず、セント・トマスでしばらく「休暇でのように」過ごした後、また好きなように暮らした(他人に迷惑かけることなく自活した)。

島内外の様々な人々と付き合い、彼らの生活を観察していたわけだが、その間最も印象を与えたのが、アルコール中毒症が少なくないこと、彼らの生活が身心共に(麻痺など)様々な打撃を被っていることであった。周囲の男

性たちが「ラム酒で人生を台無しにしている」姿を常に見せつけられ、そのような生活には入りたくないと思い始め、その時選択したのがラスタファリズムである。ラスタファリズムについては、主に雑誌「ラスタファライ」は語る(1) (Rastaman Speaks) やその他ラスタの書いた本などを読んで基礎的知識はあった。身もち崩した「アル中」は、普通のアングイラ男の行く末の一つの極を示しているが、それへの訣別を示す一大方策がラスタファリズムであった。それはラムからマリファナへの転換でもある。

彼の場合ラスタファリズムを「人生を最良に生きる方法」として捉え、生活様式は一変する。食生活も「アイトル」とし、ロックスも伸ばし始める。ラスタファリアンとしてのアイデンティティをこのように示し始めると、た

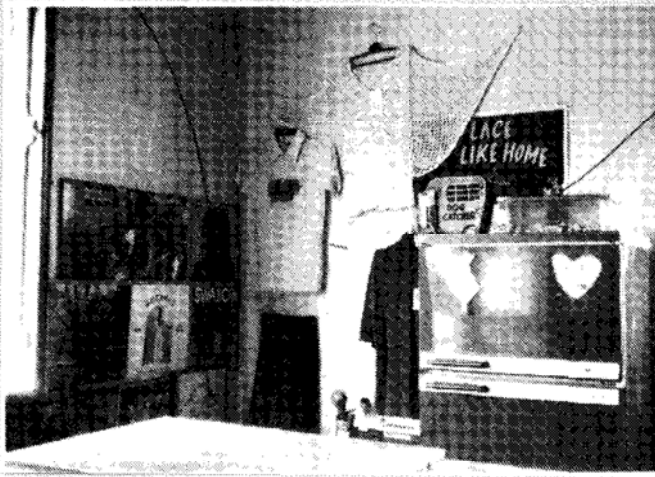
だでさえ雇用機会は欠如しているのにラスタファリアンだというだけでわずかのチャンスもまず閉ざされてしまう。ラスタファリアンはここでも人々の呪いや汚名の対象なのである。

まもなく自活、自立の道を現実的に捜し始めるが、自己の主義や信条を買ったためにも、自然食販売へ進む。島内では前述した土地条件のため、食料品の完全自給自足は不可能である。彼も仕入れに隣島のセント・マールテン(St. Martin)などへフェリーで渡る。顧客は多くないため、一度に大量の買出しはあまりしない。店頭に品数多く並ぶ時でも、ごく少量ずつである。バナナ、プランテン、ココナツ、タマネギ、リンゴ、スイカ、オレンジ、サツマ芋、ヤム芋、タニヤ(Tanya)やエドワ(edo)といったタロ芋の一種、落花生、レンズ豆(袋入り)、くずう

こん粉(箱入り)、蜂蜜(ビン入り)などが陳列されていた(写真⑧)。食料の他、やはりセント・マイルテンで仕入れた毛糸のラスタカラーのタムも売っている。

店はザ・ヴァレイのメイン・ストリート沿いのコーナーにあり、ラス・スマイトの在・不在はすぐ外からわかる。店の前の木陰では、友人・知人を混じえて歓談する姿が平日の労働時間内でも時折見られ、店が商売上の経済的道具であるよりは、むしろより社会的な意味を持っていることを示唆していると思われる。

②ラス・ジュリー・ライオンの例
ラス・スマイトの知人ラス・ジュリー



<写真⑧> 入口のカウンターの内側にレゲエのレコード・ジャケット、カラーシャツ、レース編み女性用ブラウス(売物)を飾っている。訪れた時、この大型冷蔵庫の中はほとんど空で、飲物(モービー、ビール、Vitaモルト、スタウト)のみ数本入っていた。表の看板にあったフルーツジュース等はなかった。ラスタなのにビールなどのアルコール飲料を扱うことについては特別の「釈明」もなかった。客寄せのためと思われる。



<写真⑨> 空港の荷物運搬係となっているラス・アイボの仕事ぶり。

・ライオン (Rag Lion) も軽飲

食店アップタウンJを開いている(写真⑩)。場所はザ・ヴァレイの中心部から車で約二十分走った幹線道路沿いにある。建物自体は比較的大きく、ラス・スマイトの店の約二倍はある。入口付近にカウンターとスタンドを置き、店内外の装飾も進んでいる。ラス・ジュリー・ライオン自ら作成した小ざんご細工も幾つか置き、レゲエのレコード・ジャケットや自作絵画を数枚飾り、カラーシャツや女性用レース編みブラウスを壁に貼り、売物としていた(写真⑩)。ただし絵画では直接ラスタファリズムに関係あるもの(自画像やボブ・マレイ像)は少ない。

かった。

店内外には椅子や机を置いてあり、毎週金曜日夜に(レゲエ)ダンス・パーティーなども開けるようなスペースをとっている。表の看板や店内カウンターの黒板に書かれた幾つかのメニューには、フルーツジュース、ココナッツ水、モービー (manbie)、ジンジャービール、ビール、スタウト (stout)、モルト (malt・麦芽酒)、ソーダ水、コーク、サワーサップ (Sour sop)、チーズ・サンドウィッチ (manwich)、木の実に野菜パーティー等が書かれていた。ただし訪問時には数本のビン入り飲料水があるのみであった。

ラスファリアンの中にはアルコール

ル摂取の忌避を明言する者が多いが、ビール、スタウト、モルトの類はアルコールとは見なされない場合がよくある。ほとんどはラム酒を指す。この店で販売することに少しの躊躇も見られなかった。レゲエ・ダンス・パーティーなどノン・ラスタの若者も多く集まりうる場では、軽いアルコール飲料はむしろ必需品とさえ考えられている。

アップタウンJの場合、人通りも多くななく、観光客も素通りしてしまいそうな場所であり、実質的利益はあまり上がりそうにない。彼の意図の一つは若者の社交場作りと考えられ、ラス・スマイトの例同様、経済性よりは社会的機能を優先させていると解釈できる。

③キング・ラスマウスの例

ただし経済性の方を重視し、隣島セント・マイルテン島のマリゴットに店を持つ場合もある。二十才のキング・ラスマウス (King Rasmaus) の店アイタル・シャック (Ital Shack) がその例である。彼はアングイラのノース・ヒルに住み、観光客目当ての海の専門のジョナス・フィッシュ・ポットという名の大レストランのウェイターをしている。かつてはロックスも伸ばしていたが、「良い」(収入の多い)職を得たので(心はラスタだが)ロックスを切ったと言う。反社会性の一大象徴であるロックスは、特にイメージが重要な要素になってくる観光客向けの

職とは相入れず、収入のためには切り捨て可能とされる。同レストランは地元の有志のパーティ等にも利用され、客の方もロックスの有無で受ける印象は全く異なる。彼への評価もロックス無しではじめて仕事ぶりが「正当に」評価されるのである。

以上例示したような飲食店関係では常にレゲエが鳴り響いている。

④ラス・アイボの例

その他空港の荷物運搬係に従事しているラス・アイボもいた。二十八才のラス・アイボ (Ras Ibo) (写真⑩) は島生まれの島育ちで、十四年間ラスタファリアンである。ロックスは十二年前より伸ばしているが、七〇年代初めに警察に捕まり、髭は免れたがロックスを

切られ、その後また伸ばし始めて現在に至る。空港で働いて一年半になったが、以前にも同じ職を得ていた。当時の給料は悪く（いくらかは忘れたといっていたが）、一度はそれで辞めたが、現在は「良く」（月三四〇ドル）、比較的満足している。

彼は音楽の才能に長け、作曲数はこれまでに百曲以上にのぼり、また自ら歌う。当初はカリブソニアンで、カリブソ・コンテストでは首位を争う位置にあったが、ラスタというだけで審査員に嫌われ、なかなかカリブソ・キングの座はめぐって来なかったと言う。ただし聴衆は彼の歌を高く評価し、ラジオなどでも時々彼の歌は流される。しかし国家的行事である公認のコンテ



〈写真⑩〉 ロックスを見せるラス・アイボ。彼の色彩表現に一般のラスタカラーでない青が含まれている。

ストという場では、「公」の表向きの価値観が優越し、審査員というフィルタを通すと、彼の歌自体でなく、彼のラスタファリアン性が大きく問題とされる。「トリニダードやセント・トマスではラスタでもカリブソ・キングになれるが、アンティグア、セント・キッツ、アングイラでは絶対になれない」と言われるとおりである。それは社会のラスタファリズム（「アフリカ性」）に対する理解及び寛容／許容度の問題である。

以上、ラスタファリアンがいかに「誕生」し、拡大していったか、その展開を乏しい資料から再構成してまとめてみた。また実際にラスタファリアンの生活がわかるように、四人をモデルとして登場させた。これらを念頭に置きながら、彼らのイデオロギーをより深く理解してみたい。またそのイデオロギーが個人的、社会的諸経験の実相のなかにいかに反映されているのかも、合わせて探ってみよう。

Ⅲ イデオロギーとプラクシス

1. コスモロジー

ラスタファリアンはまず第一に「神」を考える。唯一絶対者で、全知全能の至高神であり、真実で全ての創造者である。きわめて人格化されていて、その性格はユダヤ・キリスト教の伝統を如実に示し、聖書にそのモデルはしばしば求められる男性神である。

アイデンティティ・クライシスを経験した時、自己や現在の世界がいかに創られたかを強く探求したという話をよく聞いた。創造者の確定過程で、自己の経歴や自己を取り巻く、自己の知りうる限りの、小世界の歴史を省察し、過去から現在の自己のアイデンティティを固定してゆこうとする。その模範ないし追求過程で、最も大きく依拠されたのが聖書の神なのである。

彼は現在でもカリブソを書き歌うこともあるが、それでは機会を与えられず、正当に評価もされないと嘆く。現在「本来の音楽」はレゲエと自認している。カリブソはテンポが速く、「酔い（Fly, Kind）音楽」（カーニバルで露呈するように）であるが、レゲエはよりスピリチュアルであり、真の一つの愛のための音楽であるとされる。彼はそのメンバー七人全員（アングイラ人がラスタファリアンである「ジャー・ムーヴァーズ・バンド」(Jah Movers Band)の一人としても活躍している。このグループ及びもう一つの有名な全員ラスタファリアンの「バンキー・バンクス」(Banky Banks)も、レゲエのみしか演奏しない。ただしこの島ではレゲエだけではプロのミュージシャンとはなれないようである。

そして、その神はユダヤの神エホバ (Jehovah) を想起させる名「ジャー」(Jah) と呼ばれる。その神格はイエス・キリストと聖霊の神性を否定し、三位一体ではない。むしろ超自然的かつ超人的性格のものを想定している場合が多い。また時にジャーは、故エチオピア皇帝ハイレ・セラシエとも同一視される。ただしこれは、大変問題の多い点であるが、話のコンテキストの中で理解せねばならない。ある場合にはジャーとセラシエ帝との同一視はむしろ避けられ、彼の神性を否定する意見もしばしば聞かれる。多くの場合、セラシエ帝は神より送られた預言者ないしメッセンジャーであり、それゆえ聖性を(ある程度)帯びた存在とされている。

ジャーは「愛と平和と正義」の神である。中でも愛が最も重要な概念であり、「一つの愛」こそこの世に体现されねばならないとされる。しかしこの愛は、キリスト教で強調されるような自己犠牲ないし自己否定の観念をあまり含まない。自ら率先して他者に援助・愛の手を差し伸べるのではなく、差し出された救援の手に自分の持てるものから何かを置く、そしてそれが不可能なら仲間を助けを求める、といったような内容のものである。

平和は心の平安といかなる形態の争い、戦いの排除を意味する。そのため

にも「愛」が不可欠である。また争いを生む憎しみ、怒り、嫉妬心なども本来排除されるべきものである。しかし同時に「義」でもあるジャーは、不正、不義に対し怒りを示す。また堅固で強い ("Tatwa")¹⁶ イメージを持つ審判者である。

ジャーは創造神として全てのものを造り是認していると考えられている。至高神以外の「神々」は認められず、霊的存在など超自然界に関する観念はあまり明確でなく、むしろその存在すら否定する傾向が強い。被造物は主に人間界と自然界に分けられるが、双方とも善なるものであり、かつ神秘性を帯びたものと理解されていると考えられる。

「人間は神に似せて造られた」とされ、性善説的見解に立つ。しかし欲望を持ちたく、それに負けてしまいがちな存在である。打ち勝つ方法は「愛」である。またラスタファリの愛により、全人類は統一できると信じられている。従来黒人性が極端にクロイズアップされたが、極論はむしろ避けられ、黒人優越主義は表面立たない。ヒューマンズムム的人类平等、兄弟説をとる。罪の概念はあり、例えば人を裁くことは罪である。裁きは創造者の権限であるはずなのに、多くの人々は裁いている、と理解されている。

セラシエ帝は、「多くの人々が尊敬

するわけではないが偉大な人間」であり、「正義の支配者」である。人々は彼の行った諸悪について語るが、ラスタファリアンはそれを「見ていない」と否定する。

死は存在するが、ラスタは死なないと信じられる。不死は即ち永遠の生命の保持を意味する。死後の再生は存在しない。現世での永生があるのみである。これらの点についてはまだ彼らの年齢の若さのためか、明確さに欠け、

体系だっていない。自ら「未来のことはよくわからない」と認めてさえている。セラシエ帝はこの世でまだ存命中と信じられていて、彼の死を認めない。

ある者は自らの神聖さを主張する。それは自らの内に神の臨在を認め、自己と神の同定がなされるからである。そして祈りと瞑想により内なる神の声を聞くとする。そこで媒介物として重要な役割を担うのがガンジャ(マリファナ)である。



〈写真②〉 ロックス無しのラスタマン。そのアイデンティティを示す唯一の外見から判明可能なものは、ラスタカラーのネックレスである。身なりは小ざっぱりとし、暮らし向きは良い方である。

被造物としての自然界は、人知を超えた力に満ちたものと理解される。それは前述のとおり、島民にとって「豊かな恵み」を与える自然環境ではないことをも反映しているようである。しかし自然に密着し、自然の恩恵を受けて日々生活することこそ神の意志に沿うものであり、簡素な生活、自然流の生活様式が是とされる。これは物質文化が島内では限られたものであり、また近代文明の利器の存在、その効率性及びそれらをもたらした弊害なども知りつつあることを反映している証拠でもある。そして自然に従い、その恵みにあずかることは食生活へも大きな影響を与えている(後述)。

2. キリスト教との対比

ここではいかにラスタになったか(cf. キリスト教の「回心」、聖書観、教会観、他者への伝達を例に挙げて比較してみよう)。

まずラスタファリアンになることについて。ラスタファリズムでは回心(Conversion)とは呼ばない。それは人生の一大根本変化であり、「完全な革命」である。また過去の異質性から現在・未来の自然への転換を意味する。それは植民地主義のイデオロギー、教育内容に深く関連する問題である。前述のとおり、ラスタになった動機のものにはアイデンティティ・クライシ

スであるが、それは自己の混沌の中に外部社会の混沌も凝縮され、「異」文化、支配者文化の価値観を社会化過程で一方的に教え込まれてきた、と自覚するようになったことである。過去を振り返って残るものは異国の思考法、哲学、歴史であり、全て一時的(Ten days)なものだった。

結局ラスタになるということは、そのような植民地主義的生活への訣別を意図したものである。そして混沌の中に自分たちの生活、哲学、文化に即した秩序を導入するため、まず「神」、真の創造者/統治者を見出し出ていく。植民者のもたらした人種主義的神観は否定され、黒人の真の保護者となってくれる神のイメージをつくりあげていった。

またラスタになるということは「観念」の変化以上に、生活様式の一変を意味する。つまり実践することこそ第一義的であるとされる。無論、キリスト教でも実践の重要性が強く説かれ、それこそ真髓とされているが、あまりに有名無美化された言動不一致が、聖職者のレベルでも多く見られるようになり、形骸化傾向を免れない。それがキリスト教離れを生む主要因の一つとなったといえる。

生活様式の大変化は、外見、食生活、喫煙、若干の言語活動に主に現われている。まずロックス(ヤ髭)を伸

ばし、それをタムで覆う。ラスタカラーを身体の一部にまとう。ただしアン

グイラの場合、タム、ネックレス(写真⑧)やバッジ等の装身具をつけ、そこにラスタカラーを入れる場合が多い。装飾品は小さく、車につけるものも含め、注意深く見ないと見過ごす程度の大きさ及びつける位置である。それはあたかも、ラスタファリアン・アイデンティティの誇示をむしろ避け、ごく自然に表示する、つまり敢えて大きくクローズ・アップする必要はないという立場をとっていることを示唆しているようである。ここではロックスが最大の象徴となっている。ただし就職などの様々な理由のため、ロックスを切る者もいる(写真⑨)。

食生活では、他所でも見られるとおり、豚肉を中心とする肉食と強いアルコール、塩の忌避が一般に守られている。ただしその守り方は個人レベルで多様で、魚貝類を食する者は少なからずいる。アルコール類も前述のとおり、弱いものはアルコール飲料とは見なされてさえもないことが多い。塩分についても、摂取する者もいる。蛋白質は主に豆類から摂るが、山羊を飼育している家族がいると、その乳、チーズ、バターとして食べるという者もいた。鶏肉は食べないが、卵は食べるという話も聞いた。肉食主義の大原則は貫かれている。経済的背景も加わり、瘦身

の者が大多数である。

ガンジャはやはり聖化され、「民族の治療者」と謳歌されている。非合法なので、栽培、売買、喫煙は見つかれば厳しく罰せられる。小規模で荒れた土地が広がる島では、ガンジャの栽培はほとんど不可能で、ほとんど全員が買っているようである。秘密裡に藪の中で栽培することはあっても、ごく小規模で、自給自足には程遠い。片手で包み込める位の小さな包み一つで一〇ドルする。

ガンジャは神の被造物ゆえ善なるものとされ、特に精神的高揚、異次元の瞑想、治癒を与えるとされる。タバコを吸うと「悪い息」を得、ガンジャを吸うと長命を得るとされる。米国などでその「効用」に関する研究・実験が進められているが、茶に煎じて飲むと内臓諸器官の働きに良いとか、眼病に効く(グルコーマ)、ガンの治療で鎮痛剤(キモテリア)として使用できるといった「知識」を披露する者もいる。

またガンジャをご飯に混ぜて料理して食べる例もあった。

言語活動の変化は、アングイラでは他島嶼に比べ顕著ではないが、いわゆる「アイタル」言語を使用し始めている例が見られた。今後人数の増加と、彼ら相互のコミュニケーション・ネットワークの拡大と緊密化が進めば、言

語変化も拡大すると思われる。頻繁なるジャーゴンの使用で一般の人々を困惑させたという話は聞かれなかった。

以上概略したような生活様式の一変は、彼らにとり「自然」な生き方で、身心を健全に「フィット」に保ち、何かの行為を行う間、積極的であらしめる」ものであり、人生をきわめて「真剣に」生きさせる方策なのである。そして従来のキリスト教ではそれが不可能だったと説くのである。

ところで聖書に対する見解はどうであろうか。聖書はキリスト教の聖典であると認め、彼らも読み、完全に否定・拒絶する者はいないようである。ある者は教会に行く目的として、聖書を確認し、チェックするためとしている。かなり懐疑的な者でさえ格言・諺集と見なし、多くのインスピレーションを得ていると告白している。人生に適切で大切なものを与えると信じてはいるが、大半の者は全面的信頼を寄せるのではなく、部分的に取捨選択している。その最大の理由は、聖書の成立史にある。著者不明の本というイメージが強く、そこにまず不信感を感じる。そして翻訳の問題がある。現在流布している欽定訳のものは、植民地本国の政治的意図に染まり、部分的な翻訳であり、完全な全体性を示していないとされる。彼らの中にはマカベ書「版」が真の聖書であると信じて疑わない者も

いる。マカベ書は旧約聖書外典(第二正典)の一つであり、ほとんど入手不可能だが、彼らによると、「これを使うと投獄されてしまう」ので、しかたなく欽定訳を読んでいる。

キリスト教、特にアングリカンは、島に根付いて以来、「大伝統」を形成し、その擁護者となってきた面が強い。つまりラスタになることは、そのようなキリスト教を批判・否定し、大伝統への訣別をも意味している。そして上からつづられた伝統の批判、否定だけに終始するのではなく、新しく、自分たち固有の風土や歴史に即した文化・価値観を再構成してゆこうとする試みを試行錯誤のうちに行っていると言っても過言ではない。しかし、そこには確信に満ちた建設的行為の連続は示唆されない。むしろ大伝統的キリスト教と両股かけて、相互を往復運動し、個人の中で折衷しているようである。キリスト教信仰心の厚い島民の間で孤立しては生活できないごく少数派の彼らにとって、また批判の対象とした言動不一致、信条の実践の困難さ、つまりプラクシス・レベルでの多様性は、必然的結果として存在しているのである。

3. 政治観と政治行動

彼らの政治観及び政治行動は、他島嶼でも見られるとおり、現体制批判態度と不参加ないし拒否に表象される。

その原因は政治家による抑圧、彼らの言動不一致(公約不履行など)にあり、不信感ばかり強めて強い。自己利益の追求に奔走し、権力保持のために一般民衆を懐柔操作してきたと見なされている。政治が生活全般にわたり影響を与えていることはよく理解されている。彼らに直接関係ある諸困難や苦難、直接は関係なくともこの世に現存する困苦、栄養失調や飢餓(アングイラではとりたてて言う程のものはないと公言されている)も、結局は政治が悪いからだと思われている。

ラスタの中にはI章3節で触れたいわゆる「アングイラ事件」、六七年の英国による「侵略」を鮮明に覚えている者も少なからずいる。「それまでに見た事もないような銃、ヘリコプター、艦船、武器」が一度に大量に現われたのである。それは「未来への不安」につながったという。その衝撃は本国に対する不信をかきたてた。

しかしそれだからと言って独立推進派になるわけではない。彼らは独立も植民地状態も根本的には同じだと説く。つまり政治制度を云々しても、彼らを受けられるものは益なしで、時々の暴虐さえあるだろうと予想している。真理、法、尊敬、平等の権利といった概念は政治とは矛盾し、盲目や虚無を意味すると解される。選挙でも投票せず、棄権により自分の意志を表明する。

彼らにとって「国家の中の国家こそ最高位の国家」であり、そこにおいてはじめて真理、法、尊敬、平等の権利も確保される。現在の政治、即ち虚構の世界は短命だが、「国家の中の国家」は永遠のものである。それゆえ、政治家からより一層煙たがられ、敵意さえ時に示される対象になるのである。ラスタによる現在の政治制度の否定は政治家自らの権力の否定でもあり、面目丸つぶれだからである。

ラスタファリズムではまた個人主義が一般的に徹底している。各個人はあくまで個人としてあり、独立体として認識される。個人の上にリーダーをたてること自体、平等の権利や個人を主張する彼らにとっては矛盾することである。彼ら自身の間ではジャーのみが人間より超越可能な存在で真の権力者、リーダーとなる。

この考え方は各個人が説教師であり、基本的には伝道活動は行わないという特徴的考え方にも深く関連する。前述のとおり、ラスタになるところはあくまで各個人の自覚、内からの確信の自発的表出である。召命観も排除される。「伝道」は不要なのである。教会のように聖職者と平信者といった区別も排除し、神と個人の神秘的直接交歓を唱え、人間界でのヒエラルキーを否定する。それは彼らの間の凝集性を困難にし、拡散化、分散化傾向を生

みはする。会衆化を嫌い、それが組織化を困難にする。前述のとおり、組織化の必要性は認められても、実現化になかなか至らないのは、このように根本的理念に一因しているのである。

なかにはそれを明瞭に把握している者も少なからずいる。そしてそれは、集合化することで警察当局など体制側からの暴力、迫害を生んできた事実にも裏づけられてもいる。それを恐れているのではないが、組織化はまだ時機尚早だと認識しているのである。

組織化することへの賛同は、単に「人数が多ければそれだけ楽しい」といった理由もあるが、それが共にあらゆる話題で議論 (reasoning) することの意義に結びつくことも大きく影響しているようである。組織化したところで自分たちの境遇が変わるわけではない、関心を示さない者もいるが、大半は「土台」をたてておくべきだと思っ

てなすべきか、またできるかといった内容のもの) を練り話し合うなかで、相互の個人的利害も対立しないし矛盾を露呈する可能性も出てきた。

彼らはそのようないわゆる恥部を外部に漏らすのを潔しとせず、具体的かつ詳細な葛藤の内容を情報として得ることはできなかった。ただ話の内容から判断すると、金銭面に絡むことが最大の問題であつたらしい。「組織化がなかなかできないのはお金がないから」と理由づけられている。資金不足のために人を集め、動員し、場所を確保して何かをやるうとすることもできないと考えられている。他者の援助はどうか、自己を含む共同作業、事業のためにも、自己犠牲を払う程のことではないというわけである。

以上概略したように、政治的逃避主義に近い態度を彼らはとり、権力獲得へ意欲を燃やしているわけではない。しかし政治文化といった広義の政治的影響力をも含めて考えると、イデオロギーのレベルではかなりラディカルな動きも見られないことはない。ただその実践化への過程がきわめて困難であるというのが現状である。例えば組織化で必ず問題とされるアフリカ帰還 (repatriation) は、政治的課題に含めて考えることもできる。

4. アフリカ化

ラストファリアンの強い「アフリカ人」意識は、黒人のアフリカ帰還の具体的実現への願望を生んだ。この島ではマーカス・ガーヴェイの「預言」は強く人々の心に残っているわけではなく、しかし彼は黒人を統合強化し、「正しく生きられるように」援助し、黒人運動のために闘った一人の偉大な人物としてラストマンの心に覚えられている。ところで彼の「アフリカ人のためのアフリカ」は、きわめてユートピア的な色彩を色濃く添えられている。それは「原初 (始源)」に戻った状態と観念的に解釈され、エデンの園を想起させる。「全てが純粋で清らかで、自然」であり (ジャー) の「律法が支配し、愛と平和と義の地を意味する」。

つくづくと溜息混じりに「アフリカに着きたい。(アフリカ) 帰還が実現して欲しい」と語ったラストマンの表情には、見たこともないアフリカの地への憧憬と、その実現可能性の少なさを心はからずとも納得している気持ちがありありとかがえた。

アフリカ帰還といっても、その解釈は実に多様化されて現在に至っている事がジャマイカでは確認されたが、アングラでは個人差はあるものの、ほぼ一般的に実際にアフリカへ移住することと理解しているようである。例えば前述のラス・ジュ・ライオンは次のように語っている。

「個人的にはアフリカに行きたい。他の島々に行き暮らしたことがあるけど、そこらと同じようにあちら (アフリカ) にも適応できるさ。あそこでは物事はスムーズに進んでいて (むこうに住んでいる) 家族が言っている。地域について勉強したよ。流水、風に吹き落とされた良い果実、農業に適した土地……。きちんと手続きを踏んだら必ずそうわかるさ。あそこには二十五人定着した。彼らにある土地を与えたからだ。あれと同じようになされるのを見たのさ。あそこへ行って、種や鋤やハンマー、のこぎりを持って暮らすんだ。」

……色々な問題があっちにもあることはわかってるさ。でもあそここの家族たちがちょうど教えてくれるように、もし物事を正しく見なければ、もっと悩むことになるだろう。……我々は組織化されなくてはならないんだ」

この「アフリカ」はより具体的には、エチオピアのシェシェマニにラストファリアンに与えられた土地を指すと思われるが、話に聞いたのみの空想上の理想郷が、エデンの園や聖書中の豊かな土地のイメージと重ね合わされ、全てが良いように組み合わされているのである。このアフリカ帰還を実現化するためにも組織化がなされつつある、と指摘する声もあるが、実現化は現状ではほとんど不可能だと思われる。

「アフリカ」を考える場合、ではアングイラではアフリカ文化なるものはいかなる位置を占めているのだろうか。それは教育とも密接に関わってくる問題でもある。

まず重要なことは、島民の多くが、島には「アフリカ文化」なるものはほとんど存在しない、と考えていることである。実質(践)上も觀念上も、「小伝統」(Little tradition) (cf. レッドフィールド) なるアフリカのものは排除され、無価値で、醜悪さ、劣等さを象徴するものと見なされてきた長い歴史を彷彿とさせるものがある。そしてそれはラスタになった動機にも明瞭に表われていた。「異文化」「異国の思考」を教え込まれていた、と彼らが言うとき、その「異」質性は、宗主国英国の価値観を指すのである。

例えば最も規正しく、權威をもち、そこでの反応ぶりでの後の人生航路さえも大きく決定づけてしまいがちな制度としての学校で、学習内容はほとんど英国式のもの直輸入であった時期が長かった。二十代後半の若者が学んだことは、「ほんの少しの西インド諸島史と多くの英国のもので、すべて一時的、仮のもの」であったという。その経験から、「すべて書かれたもの(書物)は、彼ら(英国人)のやったこと全部を扱っているように思え、書物及びその内容に対する不信感をもつ

ように至った例もある。欽定訳聖書に対するアンビヴァレンスも同根の理由による。

自らの血のルーツの文化に関してはほとんど学校では習わない。学校教育期間も短く、家/社会で自然に過ごす生活の場で、先祖伝来のアフリカ文化は口頭伝承ないし生活体験として継承されてきたかという、きわめて否定的である。土地の非生産性は宗主国の注目を常に浴びることを避けさせたが、島の小規模性は、植民地主義の浸透度を比較的円滑にしたといえる。

アナンシ(Anancy, Anansi, Nansi...) 物語は、カリブ海域の黒人口頭伝承の筆頭に掲げられる、西アフリカのトリックスター神話/伝承のカリブ版である。動物が次々に登場し、主役の「蜘蛛人」が自らの弱小さを(悪)知恵で強大な相手をも打ち負かしてしまふ妙味が、よく満月の明るい夜に、古老たちにより、子供たちに語り継がれてきた。歌や動作の豊富なパフォーマンスであった。しかし近年は旧世代の変化への志向性が大きいため、「古いもの」を捨て去る動きが強くなってきている。アフリカの文化は遺棄され、欧米的近代文明の所産の導入が善とされる。アナンシ物語はもはや語られず、子供たちはほんの少しの「語りもの」としてのアナンシしか知らない。図書館から本として借りて読むことはあっても、

それは以前の生活の生き生きとした実相からはかけ離れたものとなっている。ただし話の内容、つまりその話の展開や思想は今でも好まれていることに違いはない。ラスタマンもその例外ではない。

ところで近代化への変化の希求についてであるが、それは旧世代のアフリカ文化の遺棄傾向と背腹一体という側面が大きいことは事実であるが、と同時に脱植民地主義化、地域自立化の側面も含んでいるということである。文化的レベル、「見解」や意識のレベルで、若い世代を中心に、より地域に適合したものを求めてきているのであり、それが実践化されつつある。例えば西インド史(カリブ海域史)の学習の拡大、基礎知識で地域性を十分配慮した地域向けの教科書の採用など教科書内容の充実化が図られ、歓迎されている。ラスタファリアンもそれを大きく評価している。

もう一つ「アフリカ文化」を表象するものとして、オビア(Obeah, obi)がある¹⁶⁾。これは妖術(witchcraft)や邪術(sorcery) 両方の概念を含むような、定義困難なものである。専門家としてのオビアマンになると、呪医として高い威信を与えられる場合もある。ただしその存在は尊敬と怖れ、時には侮蔑さえも含まれるきわめてアンビヴァレントなものではある。現在島では

邪悪なことをする者を誰でもオビアマンと拡大解釈しているようである。ただし専門家としてのオビアマンはいないと言われる。

前述したように、キリスト教の浸透は、アフリカの宗教伝統の残存形態を多く残さず、それらは「迷信」、「サタンの仕業」などと再解釈され、「悪」の世界に属するものと価値判断されている。ラスタファリアンは「新しいアフリカ文化」の創造を目指すと言言し、古いアフリカ文化、つまり地元で継承されてきた「小伝統」としてのアフリカのものをさえ、否定や排除の対象としてきたが、それは一般島民の姿勢とは大差ない。ただし島民の中にはオビアに関する話をよくする者もいるが、それは「心」が囚われているからにすぎないと解釈されている。オビアは「ジャー」に反するもの¹⁷⁾であるが、「言葉」だけで実体とは関わっていない者が少なくないようである。

以上述べたようにラスタファリズムで強調されるアフリカ文化は、彼らが一方で旧世代から継承されたアフリカ性を部分的に楽しみ(アナンシ物語の例)、自らの地域文化、歴史を総合的にさらに知ろうとする動向(学校教育の例)を通して、史実に即したアフリカの実像の知識の獲得、及び自己の背負ったアフリカ文化の評価などを通して、一般島民の考えるローカリゼーション



<写真③④> 階段も完成し二階へ通じる。



<写真③⑤> ラス・スマイトと建築中の新居。この家のすぐ後方に菜園の区画をとってある。



<写真③⑥> モンキー・ジャー。土器。飲料水を入れておくと、水がよく冷える。

ン、つまり地域の自立化、地域性(特徴)の強調と歩調を同じくするものと考えられる。それは他所でも見られた地域、生まれた土地のアフリカ化、アフリカ性の再活性化(Re-Africanisation)と同質のものとして解釈できる。

またもう一方で、一大特徴であるアフリカ帰還思想は、アフリカへの移住として実現されるべきものと解釈されているので、島内の事柄には高い関心を本来的にもたせない枠組として存在しているということもできる。そしてその字義通りの実現化がほとんど不可能であることを認めざるを得ないので、欲求不満が増殖していることも事実である。その解消策として、生活条件のよりよい島外地域への移住ないしは求職・就労活動、島内定住化志向を強めつつ、独自の生活様式の展開、レゲエを主体とする音楽文化の発展などを実

践し、それがまた島内のアフリカ文化の再活性化を促すといった現象も見ることができるといえる。

ではラスタファリアンの社会内での位置はどこにあると考えたらよいだろうか。少数派としていかに独自性を表現しようとするか、その姿を、住居、家族環境、音楽に焦点を当てて理解してみよう。

IV 社会内での位置

1. 住居

ジャマイカでラスタファリアンの住居といった場合、スラムや孤立した場所での掘立小屋など、きわめて簡素で「人生は簡素で自然であるべし」という彼らのモットーをまさに体現したものが、一般的イメージとして定着していた。実際はきちんとした木造やコンクリート製の中規模(なかなかにかなり大きな二階屋を建てたものもあった)の家もあったが、当初が宿無しか、密集したスラムの一角に辛うじて寝場所を確保できた程度のものであった(現在もそれが消滅したわけでは決していない)、その強烈なイメージは独り歩きさえしている。

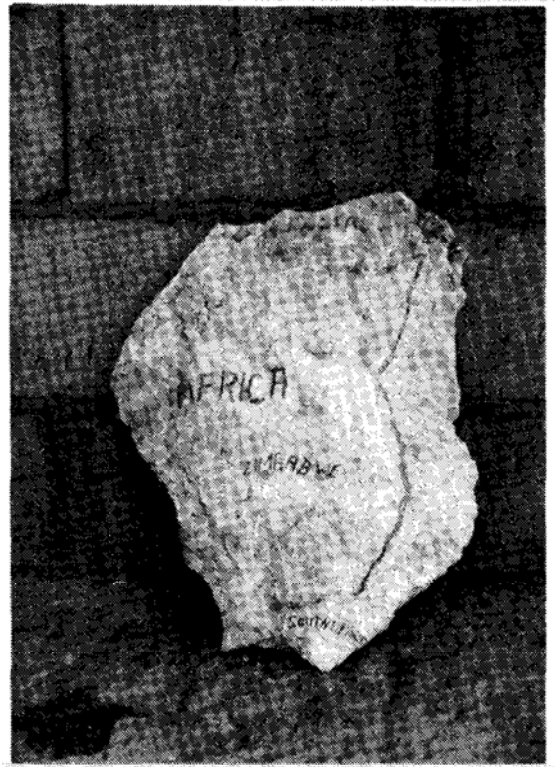
アングイラの場合、前述したとおりスラム形成も無く、土地は余り、不法占拠しても立ち退きを要求される理由も見つけ難い程、住居空間を物理的に

見つけることは困難ではない。ここでは土地の確保よりも資材の調達の方が問題らしい。独立志向の単身の若者がきわめて多いなかで、個人の家を持つ

ている者はむしろ少ない。家族と同居したり、親族の家に寄留する例を見た。彼ら同士集合してコミュニティをつくったという話もない。そのため、前述



<写真⑳> 台所用品を乾かしているところ。鍋、壺、皿類は土、石、ひょうたんなど自然のものばかりである。



<写真㉑> 家の表のポーチに立てかけてある石製アフリカ大陸図。その他数は多くはないが、木彫のアフリカ的な仮面なども置かれている。

のような店を除いては、住居としてラスタファリアン・アイデンティティを明示するということはなかった。ただし自分の家を持ちたいという願望は多くの者が持っている。
彼らが個人の家を建てる場合はどうか。一例が必ずしも他を代表するわけではないが、ラス・スマイトは当時、自分の家を建築中であり見せてもらった(写真㉒、㉓)。それは荒地の高台の上に建てられつつあった。周囲に民家は無い。家はコンクリート製でブロックを積み上げる。二階建にし、ガラス窓をつけている。六角形というきわめて珍しい形とデザインで、しかも外見上も立派、これが簡素さの表現かと驚かされた程であるが、建築過程、立地条件の中にもそれはうかがい知ることができた。ブロックは一個二BC\$で買い、ガラスも鉄棒、木棒など全てザ・ヴァレイからトラックで運ぶ。友人・知人に手伝ってもらい、自力で建てる。六角形については、それが最も美しく、格好良いと思ったからという以外の説明はなかった。高台で偏西風を常に浴びるので、頑丈な造りでないともろい。一階には大型ベッド、シャワー室、水槽を配置し、土製水がめ「モンキー」(土製なので中の水はよく冷える)、木製ロッキングチェア、その他細かいひょうたん、木、石などで自分で作ったラスタファリアン・アイデンティティ

イを表現する装飾品、身回品、ラジオ、簡単な読物数冊が置いてあった。貴重な水はやはり町で買い、トラックで運ぶ。一五〇BC\$で五〇ガロン以上買える。それは床下に作ったコンクリート製水槽(約二×三×三m)に溜め、バケツで汲み上げて使う。台所用品及び食器は土製、ひょうたん製のものを主とする。
これから二階の建築を進める予定だが、資金不足のため中断、完成予定日は特にならない。屋根はトタンにする予定である。目下のところ彼の人生の最大の目標が新居の完成である。「庭」も菜園用に空間を確保し、ココナツ、バナナ、パイア、にんじんなどを少しずつ植え始めている。しかし瓦礫だらけの土地で水不足、手入れも行き届かず、生育状態は良くない。ただし、新居が完成し定住するようになれば、菜園作りに注ぐ時間も労力も惜しまない勤勉のイデオロギーを持っているので、自給自足を目指して、自然に密着しつつ生活をするであろうことは予測できる。またそこが友人、知人の集合場所の一つとなつてゆくことも可能性としては大いにありと考えられる。ただし立地条件により、一般島民との新居付近でのコミュニケーションは稀薄であろう。
この新居は一人で住むには十分過ぎる程の空間をもつが、現在は独身でも

「適当な相手」がいれば、いつでも自己を頭とする新家族を形成したいと彼は願っている。そのことも予想している。では次に家族についてみてみよう。

2. 家族環境

ラスタファリアンの家族形成理念は、基本的には聖書の規範を共通原理にしているが、地域差もまた見られる。アングイラでは純粋なラスタ家族は存在しない。ラスタの女性二人とも独身である。理想的には「適当な相手」はラスタファリアンでと考えてはいるが、現状より判断してあまりこだわりを見せない。「後でラスタになれば」、「良い人だったら」、「一つの愛さえあれば」（それが「正しい愛」を生むと考えられている）、という基本的には不一致を避ける条件を出して再定義している。そのためノン・ラスタの女性との間に「正式な結婚」の手続きを経ないで子供をもうける例もあった。

例えばラス・アイボは、三才の時に母が家を出、英国へ行ってしまった。それから祖父母のもとに預けられ、父もヴァージン諸島に移住していった。幼なかつたため、いつ両親が自分を置いていったのか知らなかつた。しかし不安や問題はあつたという。父は十五人、母は九人の子供をもうけ、大勢の異父母キョウダイがいるが、別々に育てられ、彼らも島内には現在二人のみ、あとは英国、米国、セント・トマス（米領ヴァージン諸島）などに住んでいる。休暇中はアングイラに多く集まることがあるという。昔よく父のいるセント・トマスに行つたが今は行かなくなり、父の消息も知らない。そして父親の話をしたがらない。

似た話は実に多い。母親たちは短期で稼げる仕事を求めて家を出る。より良い選択の機会は島外で見つかることがよくあるからである。家族はいつも一緒にいたいと一方では思いつつも、現実の「厳しさ」に適応する手段としてとらざるを得なかつたのが、このような子供を両親や近い親族の元に預けて母親が現金稼ぎで家を長期間あけるというパターンであつた。父親／夫が経済的に一家の大黒柱となるのであれば、母親／妻との不和や争いも減少したであろうに、という一種の嘆きがそこにこめられてもいるのである。深く傷ついた者はその二の舞を踏みたくな

いと常々思い、ラスタファリアンとして「平和と愛」、調和のとれた秩序と権威ある父親／夫を中心とする新しい家族を形成する前に、男性の経済力の重要性をかみしめ、その努力をしている者が多い。

それは一般的に見られたある種の男性の無責任さ、権威失墜へ警鐘を鳴らすかのような態度でもある。それは多くのラスタファリアンに見られる人生に対する真摯な態度の一部を成している。

またこのような家族環境下で、幼少時より教会へ行かされた例も多いが、モデルとなるべき説教師など聖職者の「悪行」を知れば、当然幻滅感も大きい。自発的に出席していたわけでもないが一種の期待は持っていたので、礼拝出席の形骸化、教会離れに拍車がかつても不思議はなかつた。それをラスタファリアンは自己の心情、信仰状態に正直になり、偽らずに教会及び聖職者に対して不信感を表明し、異議を申し立てたにすぎない。アングイラの場合、キリスト教を完全に放棄したわけではなく、聖書や教会の中から何かを学ぼうとする姿は断続的にでも見られるのである。それは家族的共同体としての教会が変化（改変）すれば、ラスタファリアンを再び傘下に入れ統合されうる可能性をほのかに示していることさえ受け取れる。

また家族を考察する上で今一つの重要なキーワードは「家族計画」である。これは厚生省の管轄であり、保健衛生医療、社会福祉などの関係者の求めるものであり、健康教育者を派遣し、家族計画センター、託児所の教育プログラムや工芸店でのプログラムに組まれてその重要性がアピールされている。ただし効果はあまり上がっていない。キリスト教の保守性が特に女性の心性に深く影響していることも一大要因である。ラスタファリアンも家族計画には大反対である。その根拠を聖書に求めるところも、キリスト教との連続性をうかがわせる。ただし一般島民とのギャップはある。ラスタファリズムは母親中心家族をイデオロギー的に許さない。家族内関係（夫婦、親子）は一般島民のそれよりも親密とされる。特に父子関係は強い愛と信頼の絆で結ばれているように他島嶼では観察された。

診療所や託児所、ヘルスセンターなどで、家族の絆を保つべく、両親の子供への愛情の必要性を説くポスターが多く貼られている（写真³⁸、³⁹）、例えば母乳の必要性を説くために、「我々の子供たちは我々の未来。彼らに人生最良のスタートを与えよ。母乳」と書かれた赤ちゃんの笑顔つきのもの、「生後四ヶ月間欲しいのは母乳だけ！母乳授乳が最良の食事！『breast fed are best fed!』と書かれ、椅子に座っ

た赤ちゃんが抗議の徴として握り拳をテーブルの上に置いてある絵つきのものなどがあつた。母乳は母子共の健康のために、人工乳より良いことが強調されている。

いかに家族計画が重要かをアピールしたポスターの中には「母親になる準備はできていますか?」と訴え、若き母親が赤ちゃんを抱いている写真を大きく載せているもの、「家族計画、それには意味がある」と文字だけで強調するもの、笑顔の父親が笑顔の赤ちゃんを抱き、「父親たちも家族を計画する」と添えてあるもの、「今赤ちゃんが生まれたら何をあきらめなくてはなりませんか? 学校? 海外渡航? 職業? 映画? 人生をコントロールしなさい! 人生・生命があなたをコントロールする前に」と思案中の横顔をクローズアップさせたものなどがあつた。

これらすべては、ラスタファリアンにとつて無意味であるばかりか、「病気にさせるもの」とさえ受け取られているのである。

3. 音楽

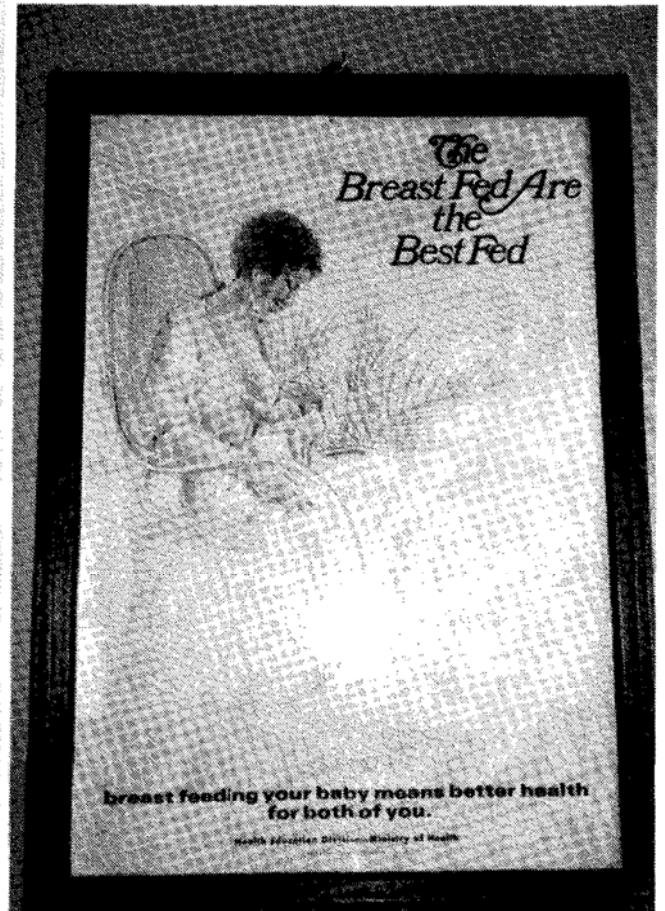
音楽文化は島を活気づける最大の要素の一つである。教会音楽(讃美歌など)、カリプソ、そしてレゲエが最大ジャンルとして存在し、なかでもレゲエが最も最近導入されたにもかかわらず、最も急速に若者の人気を集めてい

る点は注目し値する。ジャマイカで八〇年に始まったレゲエ・サンスプラッシュという盛大なイベントは、今や世界中の関心を集めるようになり(日本でも関係者はお祭り騒ぎをし、わざわざツアーを組もうという計画まで出た程のものであるが)、アングイラも例外ではない。しかしレゲエのみ演奏するバンドは「ルーツ&ハーブズ」、「バンキー・バンド」、「ジャー・ムーヴァーズ・バンド」の三組だけである。各メンバーは全員ラスタマンだとされている。

カリプソで有名な「ノース・サウンド(北の音)」というグループは、カリプソのみでなく、ディスコ音楽、スパニッシュ・ダンスといったレパトリイをもつ。ほとんどギターなど弦楽器が主体である。それに対し例えばラス・アイボのいる「ジャー・ムーヴァーズ・バンド」は、打楽器が中心となる。ボンゴ(ドラム)のダブルセット、ドラム・セット、様々なパーカッション(マラカス、グイロ、カウベル、ヴァイパー・スラップなど)、そして種々の笛がリズム音を受け持つ。その他ギター、オルガン、ハーモニカも使われる。楽器種の多彩さはそれだけ音の総合性を生むのかもしれない。この打楽器群の占める位置はきわめて大きい。それはアフリカ性を強く打ち出すからである。



<写真⑨> 家族計画を実行しないことで起こりうるトラブルの数々を想起させるポスター。左端人物の表情はきわめて示唆的である。



<写真⑩> 母乳推進のための厚生省健康教育部門のポスター

ところで音楽は学校で重要視されず、「本物の音楽」は学校教育では生まれないとされる。幾人かのラスタマンも、例えば父親にギターを買ってもらい、それを独習し、練習をし続けてマスターしたと話していた。家で習う場合もある。つまり私的で、強制的でなく自由な場においてはじめて、「文化は創造を扱うべき」とするラスタファリアンの文化哲学、創造のイデオロギーが実体化されるのである。

そしてその成果は一般民衆に高く評価されることとなる。ラスタファリズムは「邪道」だと思いが、レゲエは楽しむという島民が多いことはよく知られている。そしてその楽しみの中で知らず知らずのうちにリズムや歌詞としてのメッセージが内化される。それは次のリクエストに繋がりが、こうして循環的相互作用の過程が経づけられ、なかには直観的鑑賞や理解の相乗効果を生む可能性も醸成されてゆく。

人気が定着し高まるにつれ、パフォーマンス自体だけでなくパフォーマーも社会的位置をある程度占めることができる。そして社会的評価はその個人の知名度を高めるのみならず、ラスタファリアンとしての一般的イメージの格上げをもたらすようになってきた。それは島内のみならず世界的に著名なスターたち(ボブ・マー

レイとウェイラーズなど)の功績に負うところがきわめて大きい。その対外イメージの「良さ」が無かったなら、たとえ島内のレゲエ・ミュージシャンの質が高く、すぐれた能力を発揮しても、「聴く耳を持たない」島民にはアピールしにくかったであろう。保守的な人々の先入観は、「ラスタの音楽」として、粗野で騒々しい音の狂宴^{マニヤ}としか耳に入れないのであるから。

観光客向けレストランなどでは常に種々のレゲエ曲が用意され、客の要望にある程度応じて絶え間なく曲は流されていた。金曜日の夜はラス・スマイトやラス・ジュリー・ライオンの店などでは、若者が続々と集まり、軽飲食を共にし、踊り、話の花を咲かせ、レゲエ・サウンドが周囲に溢れるのである。週末の俗的(ラスタマンにとっては「聖」だが)音環境は、日曜日の朝の聖なる教会の礼拝音楽へスムーズに移行しているように見える。しかし一見スムーズに見えても、実はそこにこそ微妙だが重要な心的ギャップが横たわっている。そのギャップを不協和音と受け取る者がどの程度いるかが、ラスタファリズムに対する不寛容さを示す尺度の一つとなっているのである。

以上社会内でのラスタファリアンの位置を、住居、家族環境、音楽の側面から考察したが、彼らの一般島民との物理的、空間的、社会的、心理的距離

は、意図せざるも存在しているようである。ただしそれは孤立化ではなく、社会的相互交渉は様々なレベルで見られる。また基本的には両者は連続しており、表面的には接触を避けようとする態度、不寛容、無視、無関心が主に一般島民の側から見られるものの、相互に互いの存在は認められ、日常生活、音楽のパフォーマンスの場などを通して観察されている。そしてそれが評価をもたらす過程を形成していることは言うまでもない。

おわりに

アングイラのラスタファリアンたちの場合、その人数の稀少性から、社会で目立つ外在的顕著さはジャマイカやセント・トマスに比べてもきわめて低い。しかも運動としての進展度も遅い。それは高い人的移動性と深く関わっている。ラスタファリアンに(島への)定着化傾向は一部で見られるものの、他方でその移動ルートに乗っている(「より良き」生活への適応選択手段として乗らざるを得ない)ためと解釈することもできる。

また彼ら同士のネットワークは全体に密に広がっているわけではなく、高い移動率も負の力として作用し、そのネットワークを拡大しかつ緊密化する動きを若干阻止する傾向も見られる。

ごく少数の友人というレベル以外では、相互のコミュニケーションはさほど頻繁になされるわけではないようである。他の「兄弟」についての知識・情報量は少ないと感じた。相互不干渉、自立独歩の精神の表われでもある。

それらの理由ゆえか、島内のラスタファリア文化はまだ未成熟であり、点と線の占有による刺激を島民に与えることはあっても、まだ面的広がりや影響力を見るのは困難である。その稀薄さは、島民の彼らに対するイメージにも大きく反映されている。一面的見方が大部分で、立体像としてはなかなか理解できない。例えばラスタマン≠非肉食/菜食/自然食主義者、マリファナ喫煙者、社会の問題児といった否定的イメージを一般に持っているが、それ以上深くも詳しくも知らない、といった程度の浅薄な知識しか持ち合わせない。したがってこの先いかようにも変化しうるイメージということが言える。

イデオロギーのレベルでアングイラの独自性が際立つわけではないが、プラクシスのレベルではそれがやや表面立ってくると言えなくもない。例えば神観、人間観、自然観、教会観などもアングイラでしか聞かれないことはないと言ってよい程だったが、キリスト教/教会批判をしながらも礼拝出席を時々してもなお何かを得よう、確認しようとする両股かける態度及び行為が、

他所に比して多く見られる。このようなアンビヴァレンスは思考や行為の柔軟性を示しているとも考えられる。それは主にラスタファリ運動の島での歴史の浅さ、イデオロギー面での厳密さの不在、規範性の弱さなどに起因しているのだろう。

その他に観光業の影響も見逃せない。観光客に媚びるような態度、表面的愛想の良さと相手に迎合するような言動が目についたラスタマンもいた。今後観光産業の発展が見込まれているが、失業者の多いラスタファリアン、そして若者層へ、就職のために純粋な精神が曲げられてしまいう危険性があることを示唆しているようである。本来のあり方から隔たった自己の現状を正当化するためにも、そして別の面では厳しい現実を有意義に生き抜くために、イデオロギーとプラクシスの自己矛盾を生きている。そして矛盾との共存こそ、ラスタファリアンの生の生きざまを如実に表わしているとさえ言える面も大きいのである。

ところでセント・トマスの事例では、異国ジャマイカ産のラスタファリズムの直輸入・再生産に満足せず土着化の動きをもちや示していたが、アングイラではセント・トマス程意識化されていない。セント・トマスではレゲエの土着化に最もエネルギーが注がれていた印象を受けたが、アングイラでもや

はりミュージシャンに土着化を目指す気持ちがあることがわかった。彼らの感性の鋭さ、たくましい創造性（創造への意欲）ゆえのことであろうか。まだ彼らの音楽の地域固有性（ローカリティ）、獨創性（オリジナリティ）を土着化の枠組で分析できる段階には至っていない。だがいづれ音楽でそれら表現できる時が来るかもしれない。そしてその時、日常性の中では土着化傾向はどの程度進むのか進まないのか、またイデオロギーのレベルでいかなる再解釈や再定義がなされるのか、それらの課題は今後検討するべきものである。

注(1) 拙稿一九八六年『太平洋学会誌』

一月号 六七—一〇二頁

(2) 拙稿一九八六年「ラスタファリ運動の拡張と受容社会での展開——米領ヴァージン諸島セント・トマス島の事例」『史境』第十二号

(3) 本稿はしたがって、「ラスタファリ運動の拡張と受容社会での展

開」第二弾に相当する。問題意識は共通しており、各社会での実態を把握することにより、各社会での特徴をまず浮彫りにし、さらに比較検討を深める予定である。本稿はその第一段階としての基本的資料の提出である。

(4) 情報の極めて少ないセント・ト

マスでさえ、ラスタに関する資料のファイルはあるが、アングイラでは皆無であり、新聞記事になつたかどうか不明であった。

(5) Parry, J. H. & P. M. Sherlock, 1971, *A short History of the West Indies* 第3版 (C.1956) London: Mac Millan, pp. 309—310.

— 310.

(6) 行政議會は総督が主宰し、首相閣僚二名、職権委員二名より構成される。立法院は任命委員二名、公選委員七名で成立する。八一年の総選挙ではアングイラ人民党(A P P)が七議席中五議席を占めた。

(7) Anguilla Abstract of Statistics 1960—1982 1984年1月, Finance Dept. p. 25

(8) *Ibid.*, p. 12.

(9) 八二年の観光客用宿泊施設の空室数はホテル—三二、ゲスト・ハウス—七九、アパート型別荘及びコテージ—一四であった。

Ibid., p. 14

(10) 八二年の統計では米国七二七七人、西インド諸島七一三〇人、英国八八四人、カナダ四三四人、その他二二二五人となっている。

Ibid., p. 13, Table 15.

(11) *Ibid.*, p. 13, Table 16.

(12) *Ibid.*, p. 6

(13) これは、自然景観以外の天然資

源の欠如にも通じ、他島嶼で見られるような多国籍企業等の外国資本の誘致へのインヤンティヴの欠如に繋がるものである。

(14) 特に好まれているのはボブ・マレーイで、「ドレッド・ナティ (Dread Natty)」他のヒット曲がよく口にのぼった。

(15) 別の情報では英国生まれとも。ただし夏期休暇中で彼女に会えなかった点については不明である。

(16) "talawa" は西アフリカのエウエ (Ewe) の "talala" (直接的、実直な、完全な、かなりの程度、全体的、基本的の意) が語源と言われ、ジャマイカなど他島嶼でも使用される言葉及び概念である。

(17) 拙稿一九八四年「ジャマイカの土着バプテスト教会——奴隸制社会における黒人のアイデンティティとキリスト教をめぐって」『アジア経済』二十五巻十二号も参照されたい。

(18) プラスチック製で、手で打って「ダダダダー」という音を出す。